

9/25

被災障害者 困難切々と

つながり薄れ「ストレス抱え」

支援側も避難「何もできず…」

障害のある人が働く共同作業所の運営に、原発事故がいかに影を落としかつたか。郡山市内で22日開かれたシンポジウムで、県内の事業者らが発生当初や現在の状況を切々と訴えた。

「きょうざれん」郡山でシンポ

全国2千超の共同作業所でつくる「きょうざれん」の第36回全国大会が郡山市であった。障害者と原発問題をテーマに事業者や支援団体の職員らが登壇した。郡山市の「にんじん舎」でサービス管理責任者を務める和田庄司さん(57)は、事故直後から障害者の生活支援を続ける「JDF被災地障がい者支援センターふくしま」の元事務局長。事故発生から約1カ月後、全国からの支援者とともに県内198の避難所を回り、

112人の障害者の安否を確認した。「避難所にいる障害者の数があまりにも少ない。避難しなければいけない地域がたくさんあるのに」と思った。

調査を続けると、「避難先に迷惑をかける」との理由で、自宅で家族と身を潜めている人たちが少なくなかったことがわかった。南相馬市内に残っていた人からは「つながりがほしい」と作業所の再開を求められた。「障害のある人にとって、環境が著しく変わる避難生活がどれだけ大変かに気づかされた」

渋谷久美子さん(28)は浪江町にあった「アクセスホームさくら」のサービス管理責任者だ。「いつかは戻れるのではと思っている間に、利用者はストレスを抱え続ける」。そんな思いから2011年8月に避難先の二本松市内で民家を借り、12人の利用者と職員6人で再出発を果たした。

まずは避難生活で狂った生活リズムの見直し、施設内での運動に取り組んだ。利用者は16人に増えた。し



被災地の共同作業所をめぐる課題が次々と報告された。郡山市熱海町

かし、仮住まい先は手狭な上にトイレが一つだけ。利用者の避難先はバラバラで、送迎が片道40分というケースもあるという。「利用者も職員もともに避難者。先行きが見えないのがつらい」と心境を漏らした。福島原発告訴団長の武藤類子さん(60)は、郡山市内の作業所で働いている。「自分はいち早く支援する側にいる」と思っていたが、実際には家族と避難した。「支援する側が逃げる側となった。何も支援できなかったことが今でも心に突き刺さっている」(小沢邦男)

自主避難者ら

福島・山形・新潟 知事

山形、福島、新潟の知事が集まり、3県の連携について話し合う「三県知事会議」が19日、山形県上市市で開かれた。東日本大震災のため、福島県から山形、新潟の両県に避難している

